珠光茶碗の虚実
―同安窯系青磁碗の系譜―

小山雅人

1.珠光茶碗

戦国時代末期の茶会記に、珠光茶碗と呼ばれる唐茶碗が見える。初見は『松屋会記』の天文11年(1542)４月で、稲垣正宏氏作成の「珠光茶碗使用茶会一覧表」[注1]によると、天正３年(1575)までの34年間に23回とかなり頻繁に茶会記に見える。千利休が所持していた珠光茶碗は「ヒシホ(干塩、味噌・もろみの類)色」の唐物茶碗で「ヘラ目」が27あり、一千貫文という高額で三好実休に譲られたという(『山上宗二記』[注2])。茶の湯の祖村田珠光が好んだという茶碗がどんな碗であったのか。現在、茶道や古美術の世界で「珠光茶碗」、「珠光青磁」と呼ばれ、茶人の愛好者も多く、多くの博物館・資料館に所蔵されている碗がある。福建省の同安県でよく似た製品を焼いていた窯が見つかってからは、「同安窯系青磁」とも呼ばれる一群の粗製青磁の碗である。

一千貫文というこの茶碗の価格を実感するために、当時の物価を現代と比べてみよう。当時、各種の宋銭や明銭が日本の通貨であった。例えば永樂通寶１枚が１文で、1,000文が１貫文になる。米１石が享徳元年(1452)に1,000文、大和で天文元年(1532)に1,000文、永禄10年(1567)に856文、天正15年(1587)に2,252文という資料がある。現代の小売りの米10kgが5,000円とすると、１石は150kgであるから75,000円となり、１文は33円～88円となる。これを仮に50円としてみると、番匠(大工)や鍛冶職人の１日の手間賃100文は5,000円、清酒１升20文は1,000円、京都の薄皮饅頭10個60文は3,000円となり、それほど違和感はない[注3]。

１文50円として見ると珠光茶碗１千貫文は５千万円となる。極めて高価である。発掘調査で出土する同安窯系の碗を頭の中でイメージすると、なお更べら棒な額にも思われる。ちなみに、堺の住吉屋宗無から５千貫文で信長に買い上げられた松本茶碗という青磁碗(高麗、越州窯、龍泉窯などの説がある)は実に２億５千万円である。この二つの茶碗は本能寺の変で焼失したという。ちなみにその80年前までは天下第一の茶碗といわれた曜変天目は100貫文、油滴天目は50貫文で、それぞれ500万円、250万円であった[注4]。こちらは今からみると安いかもしれない。

しかし、「珠光茶碗＝同安窯系青磁」という図式は、近年美術史・考古学の両面から疑

義が提出されている。これらについて次節で紹介する。

２.珠光茶碗の虚妄

西田宏子氏によると、根津美術館には３点の「珠光茶碗」が所蔵されている(注5)。第１は、箱の蓋の三隅に「珠光」「茶碗」「遅桜」と書いた松平不昧の箱書きがある同安窯系青磁Ⅰ類１ｂ（第１図７、第２図14・15）の碗である。美術書などで一般にもよく知られている。西田氏は、江戸時代以来の確かな箱書きを持つ伝世品はこの「遅桜」以外に存在しないという重要な指摘をしている。そして口縁部の内外面に見える土錆と考えられる帯の存在から、「遅桜」は江戸後期まで土中にあったものと考えられるという。

第２の珠光茶碗には伝来書が付いている。伝説めいた内容で、村田珠光が太宰府に参詣した際、博多近郊で青磁碗片を拾い、人夫を使ってあちこち掘り返し、三日目に欠けた丸碗等を掘り出した。四日目に焼物師を呼んで接合し、茶碗８個、鉢12個を得て、これらを京に送り東山殿に献上した。丸茶碗は珠光が持って都に戻った。この時、１点を記念に贈られた「駅長」（村長か）の子孫がこの伝来書を書いた米屋与七であり、この伝来書が添えられた茶碗が現在根津美術館に所蔵されているというわけである。

第３の珠光茶碗は、楽家九代の了入（1756～1834）によって補修されたもので、３分の１の同安窯系Ⅰ類の破片に、残り３分の２を了入による楽焼で補ったものである。

西田氏が紹介したこれら３点の「珠光茶碗」によって、今日なぜ同安窯系青磁Ⅰ類１ｂ式が「珠光茶碗」ないし「珠光青磁」と呼ばれるに至ったのか、その事情が浮かび上がってくる。まず、江戸後期における珠光の茶碗に対する猛烈な渇望が実感できる。茶の湯の祖村田珠光が愛用し、武野紹鷗・千利休・織田信長が所持したという茶碗である。そのものでなくとも同種の茶碗がほしい。しかしどんな茶碗か誰も知らない。珠光茶碗の本家本元である千利休所有の碗は『山上宗二記』には「ヒシホ色」の唐物茶碗で「篦目」が27あるという。想像するに、珍しい石や出土品の収集家が出てきた江戸時代中期以降、多分博多で井戸でも掘った時に出土した同安窯系青磁Ⅰ類ｂを誰かが珠光茶碗と言い出したのであろう。茶人の間では渇望されていたものの実物が出たというわけで、多少の難は無視されたに違いない（「ヘラ目」が片刃彫りであれ筋状であれ27本というのは、Ⅰ類１ｂの無数の櫛目とは似ても似つかない）。安永３年（1774）に茶器の収集を始めた松平不昧の箱書きのある「遅桜」も、西田氏や稲垣氏の指摘どおり発掘品なのであろう。各地の資料館や茶人の所蔵の伝世品も、鎌倉時代ではなく江戸時代以降に、根津美術館第２の珠光茶碗の伝来書に書かれているような方法で掘り出され、破損があれば了入のように補修・復元したものと推察できる。その掘り出した場所は現在の福岡市の博多遺跡群の範囲内であろう。

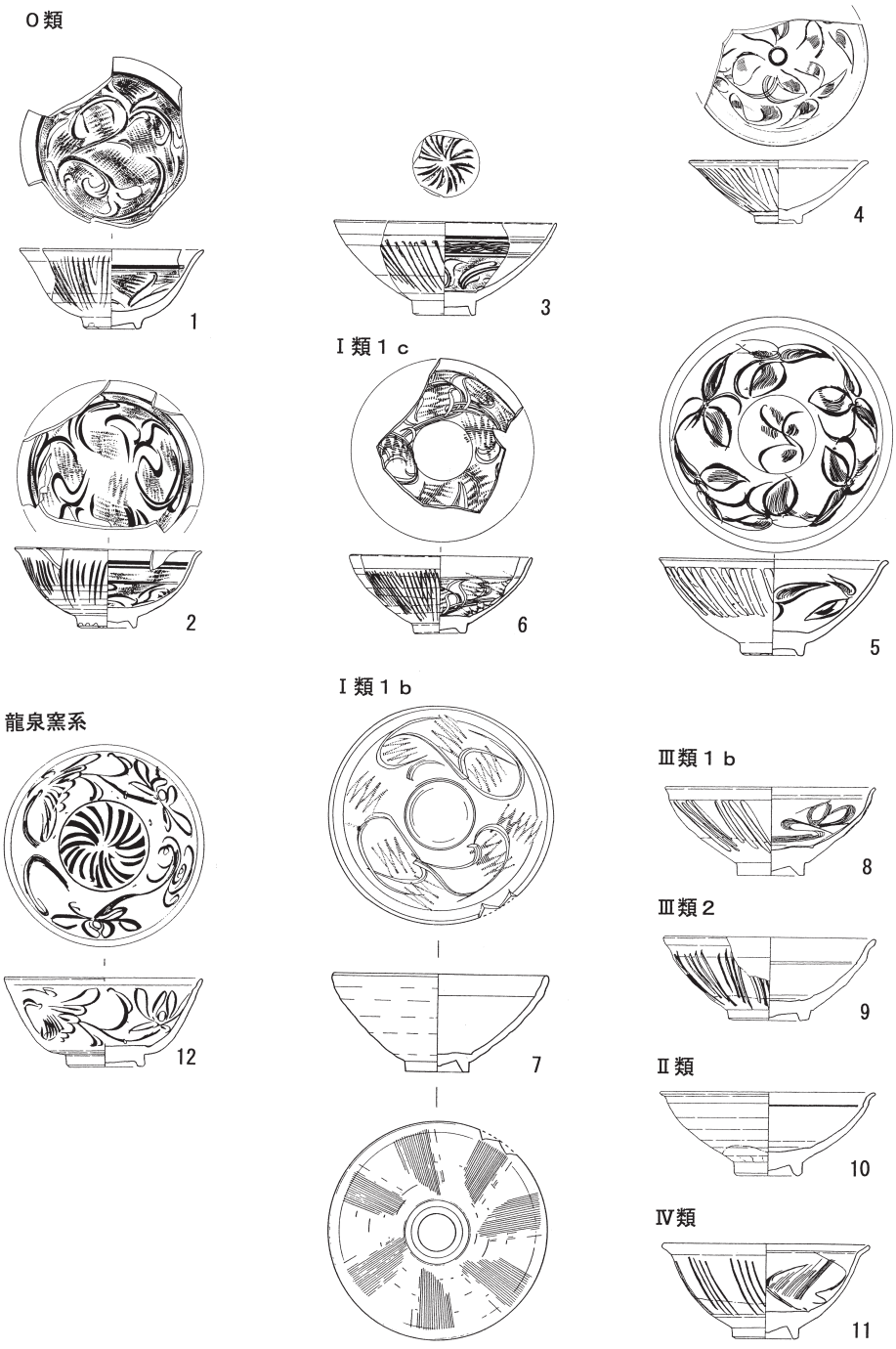
西田氏の疑義を紹介し、一歩踏み込んで「珠光茶碗」は「同安窯系青磁」にあらずとした稲垣正宏氏は興味深い茶碗を紹介している(注6)。それは天正14年(「珠光茶碗」の最後の記録から11年後)の茶会で使われた「善好茶碗」と呼ばれる茶碗で、これが稲垣氏が珠光茶碗ではないと否定し去ったⅠ類１ｂらしいのである。「外ニカキメ七處にアリ」というような表現はⅠ類１ｂそのものである(第１図７)。12世紀の日常雑器が16世紀に実際に茶会で使用されている例として興味深く、また近現代に「珠光茶碗」と呼ばれている碗は、安土桃山時代には「善好茶碗」と呼ばれていたことが分かる。同安窯系青磁Ⅰ類１ｂは、形態の特徴からも名称からも「珠光茶碗」ではないのである。

３．同安窯系青磁の系譜

珠光茶碗に比定されている同安窯系青磁は、南宋(12世紀から13世紀)にかけての時代、浙江省から福建省にかけての江南地方で作られた粗製の青磁とされる。平安時代末から鎌倉時代にかけて日本各地で出土する龍泉窯系青磁とともに、この時期の輸入陶器碗の主体を成し、時期は前者に重なるが、やや古いとされる。大量に出土するのは博多遺跡群や史跡大宰府を中心とする地域で、そこでは龍泉窯系に匹敵する量が出土しているが、全国的にみると、龍泉窯系が圧倒している。そういう事情もあり、同安窯系は看過されがちである。少ない資料という制約はあるが、夥しく出土している博多遺跡群周辺の資料によって、同安窯系青磁碗全体を展望してみたい。以下の記述には類例の点数や形式が占めるパーセントの数字を使っているが、これは博多遺跡群・田村遺跡・箱崎遺跡・和白遺跡群・久保園遺跡・史跡大宰府・御笠川南条坊など福岡市・福岡県・太宰府市の各教育委員会の報告書に掲載された同安窯系青磁碗合計530点を集成計数したものである。報告書の実測図・写真・記述に拠るもので、事実誤認も多いと思われるが、目安程度にはなると信じている。

「同安窯系青磁」と「龍泉窯系青磁」は、遡れば両者は合流し、龍泉・同安窯系青磁０類と呼ばれているどちらの系統か決めがたい一群の資料がルーツである。第１図の１・３が最新の分類案に挙げられている例(注7)で、２・４・５はそれぞれ報告書から補った。０類は同安窯系青磁碗全体の8.7%である。また０類の色調について報告書では灰緑色、暗灰緑色、モス・グリーン釉、淡い／緑の強い／深いオリーブ色、また光沢のある灰オリーブ色の釉などと表現され、他の類よりも緑味がつよく、燿州窯を思わせる製品もある。

第１図１・２は、見込みに輪状の段がなく、体部下半がやや膨らんで、ゆるいＳ字状をなす。０類は、類以下の細分類がされていないので型式名がない。この形態を「下膨れタイプ」と呼んでおこう。この形態は、同安窯系青磁に特徴的な見込みの輪状段がない点も考えあわせると「龍泉窯系青磁碗」(12)に引き継がれているようである。



第１図　同安窯系青磁碗の系譜(縮尺1/6)

３は口縁部が内湾する。内面やや上方に文様帯が巡る以外は１・２と基本的に同文である（第２図[注8]）。内面上半の帯の中の波状の複線文が直線になっていたり、空白であったりする例もある。この「内湾タイプ」の次の段階と目されるのは、Ⅰ類１ｃ（６）で、花文様も基本的に同一であるが、やや簡素化され、文様帯も一巡する単線になっている。このタイプの碗が博多遺跡群第121次調査で「12世紀前半から中頃と推測される」ＳＫ09から出土した。報告書では「12世紀後半から出現する典型的な同安窯系青磁碗よりも古相を示す」とされている[注9]。この「内湾タイプ」は、その形態は同安窯系青磁碗を代表するⅠ類１ｂ（７）に受け継がれているが、文様に関しては同文の略化なのか、別の文様なのか、判断できない。

倒笠形で見込みに極めて小さい輪状段をもつ４は０類の中でも最も古式とされる。同じ０類の「外反タイプ」の５も同文をもっている。外反する口縁と文様に注目すると、これも文様の略式化を伴ってⅢ類の８・９につながり、Ⅱ類の10も同一の系譜上にあることがわかる。

０類は12世紀初頭前後、あるいは11世紀末から12世紀前半の北宋末期に位置づけられている。上述した素描でわかるように、北宋末のひとつの原点から出発して、浙江省の「龍泉窯系青磁」、福建省に移動した「同安窯系青磁Ⅰ類」、そして「同安窯系青磁Ⅲ類」[注10]という三つの流れが生じたのである。このうち浙江省の流れは、南宋時代に世界の至宝ともいうべき青磁の名品を生み出した後、元代・明代青磁として数百年生き延びるが、同安窯系の二つの流れは、13世紀に入ると間もなく途絶えてしまう。

第２図　０類「内湾タイプ」の内面模様（縮尺1/2）

以下の同安窯系青磁碗の分類

には、①九州歴史資料館と太宰府市による大宰府分類(注11)、②博多遺跡群の調査に基づく福岡市教委分類(注12)、③亀井明徳氏による亀井分類(注13)があるが、本稿では、新たな分類案は提出せず、①の大宰府分類に従う。不都合な点も多いが、現在最も広く使われているからである。

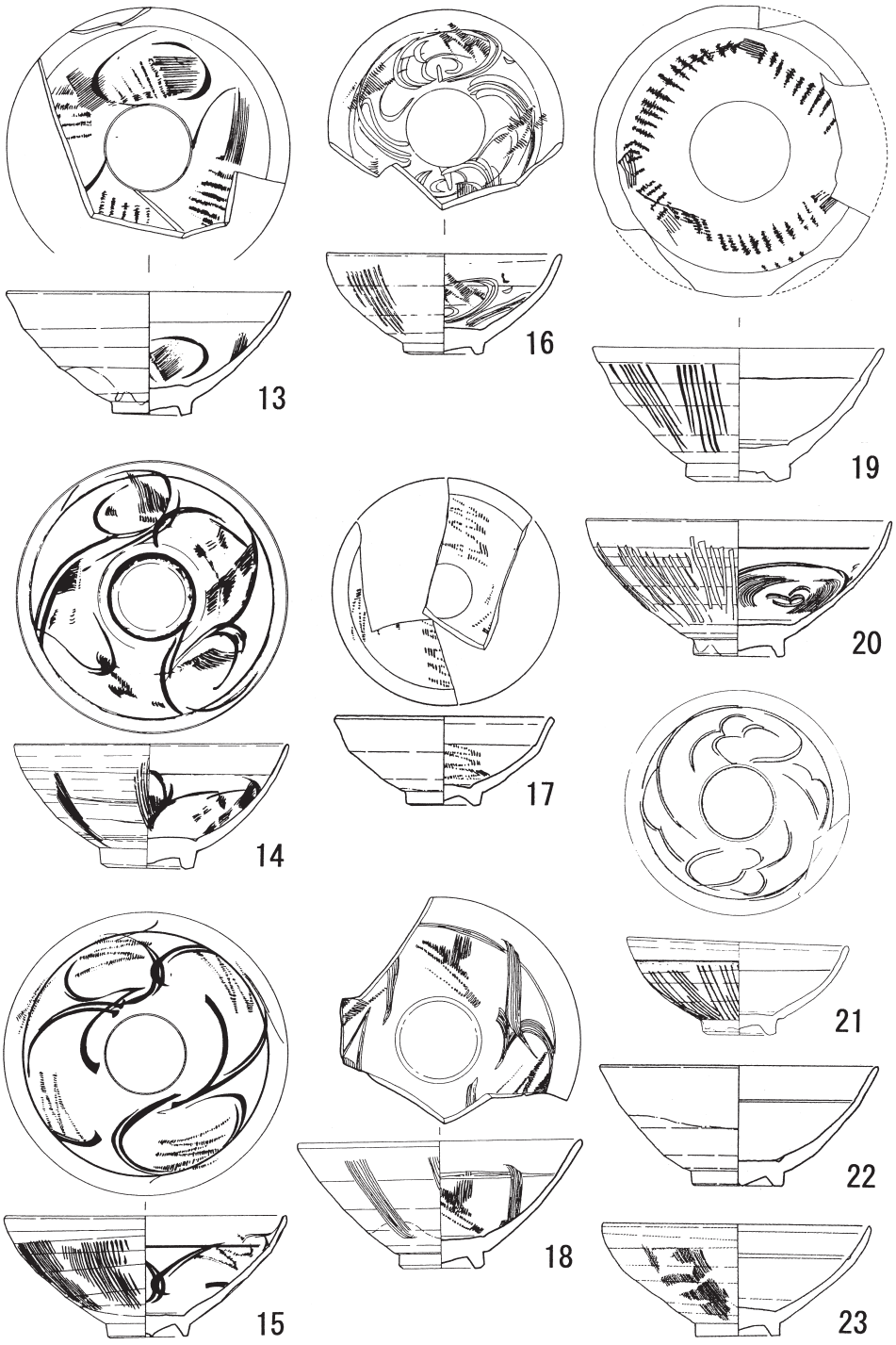
各論に入る前に同安窯系青磁碗全体の特徴をまとめておく。釉の色が米色、枇杷色、醤(ひしお)色(もろみのような色)などと形容され、いわゆる青磁色でないことが強調されがちであるが、同時期の龍泉窯産の青磁にも同様の色の製品が少なくなく、同安窯系の製品にもオリーヴ・グリーンや青灰色を呈するものがある。むしろ共通する特徴としては、見込みの輪状の段差が同安窯系青磁の終焉まで持続する最も重要な目印であろう。外面のヘラないし櫛による縦線文(猫掻き文)、内面の画花文、片刃彫りや櫛による電光文(ジグザグ文)も、同安窯系青磁の重要な特徴であるが、種類や個体によっては見られないこともある。体部上半で内側に屈曲したり、内面のその部位に沈線が巡ることも多い。また削り出し高台の特に内部の造作はたいてい粗雑である。

４．同安窯系青磁碗Ⅰ類

Ⅰ類(第３図)は同安窯系青磁の中で最も多数を占める(60.4％)。色調はオリーブ色から枇杷色まで様々である。大宰府分類では、内面の文様によりヘラによる略化した花文と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有するもの(１)だけが分類されている。実際には、櫛描きの弧文・花文・点描文、ヘラ描きの文様を施すもの、内面無文のものもある。第３図17～23にそのバリエーションを集成した。一方、外面の文様によって、無文(a)、細かい縦の櫛目文(ｂ)、やや粗い櫛目文(ｃ)の３種に分けられている。

前述したように、０類の中の内湾するタイプに直結するのは、Ⅰ類１ｃ(第１図６、第３図16)である。内面の画花文は、０類のそれをわずかに簡略化したもので、外面の縦筋も、櫛ではなく一本ずつ引いたように見える。０類などの片刃彫り(北宋耀州窯起源か)の略式化(Ⅲ類に例、第４図24～27)であって、細かい縦の櫛目文(ｂ)の退化ではない。

同安窯系青磁碗を分類すると他を圧して多いのがⅠ類１ｂ(第１図７、第３図14・15)である。そして美術館等に所蔵される伝世の「珠光青磁碗」は、おそらく例外なくこのタイプであろう。博多遺跡群周辺ではⅠ類１ｂが211点報告され、すべての同安窯系青磁碗の40％を占めている。名実ともに同安窯系青磁碗ないし「珠光青磁碗」の代表である。博多遺跡群周辺での調査による出土例は12世紀後半とされるが、京都府などの出土例は12世紀末から13世紀前半と編年される。実際に数十年の時間差があったのか、編年観の違いなのか、ここでは立ち入らない。

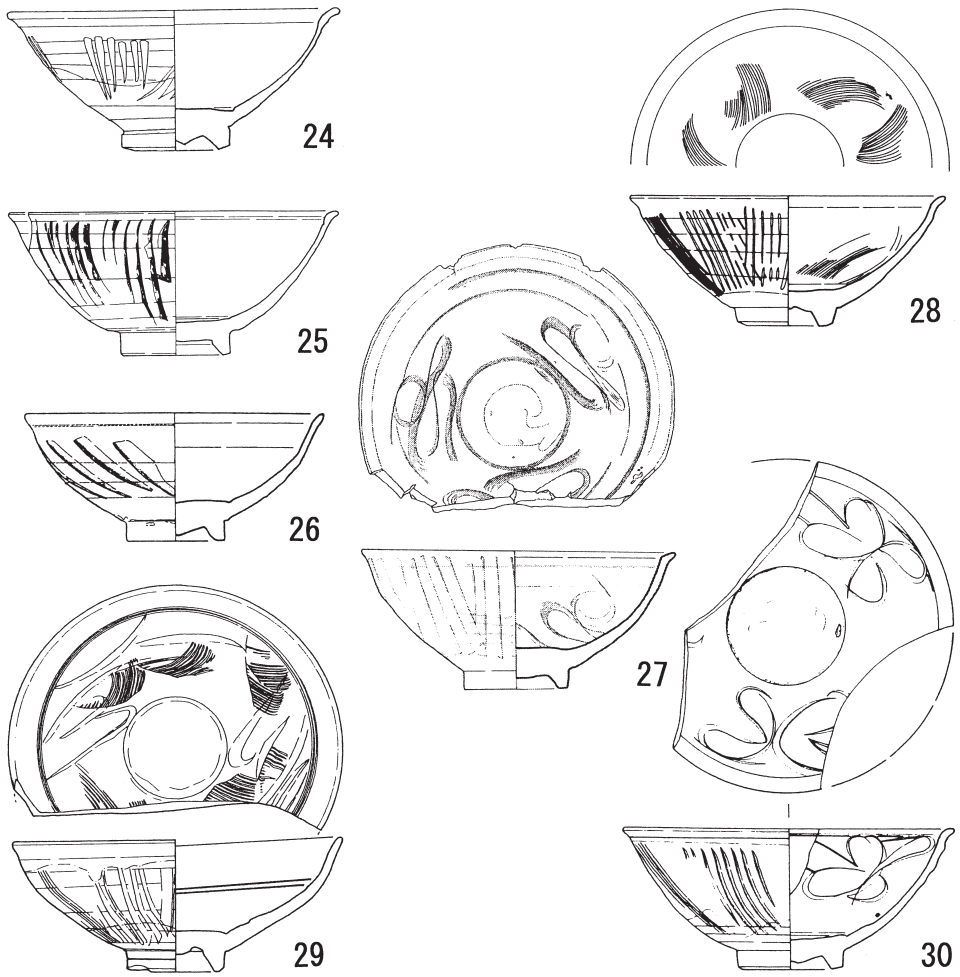


第３図　同安窯系青磁碗Ⅰ類(縮尺1/4)

５．同安窯系青磁碗Ⅲ類１とⅡ類

Ⅲ類１とⅡ類は同安窯系全体の約20%を占める。厚い底部から内湾気味に立ち上がり、体部上半で緩く内側に屈曲し口縁部をやや外反させて収める。これは「すっぽん口」と通称される天目碗を平碗にした形である。外面にはヘラの片刃切りあるいは歯の幅の広い櫛状の工具で放射文を表現する。Ⅲ類の色調は暗緑黄褐色という茶色がかったものがほとんどで、Ⅰ類ほど多様ではない。なおⅡ類(第１図10)は、Ⅲ類と同形態で内外面とも無文のものであるが、同安窯系全体の４％強しかなく、私見ではⅢ類に統合してよいものと思われる。

Ⅲ類１（第４図）の細分は内面の文様等による。内面無文（a：24～26)、櫛状施文具で略

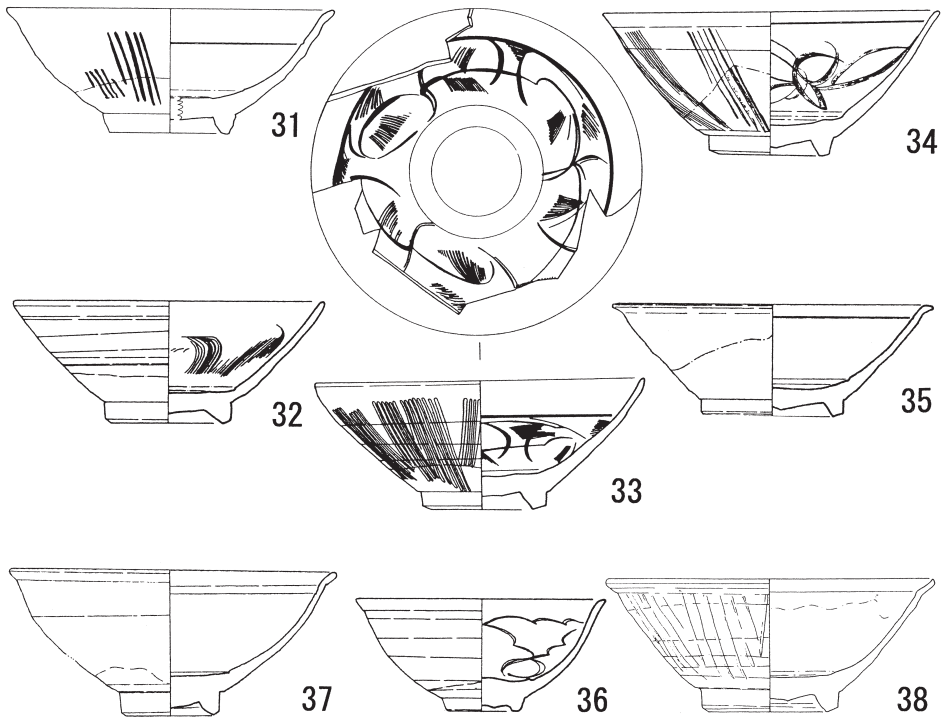


第４図　同安窯系青磁碗Ⅲ類１（縮尺1/4）

式の花文を描く（b：27・28）、櫛状およびヘラ状施文具で花文を施す（c：29）に分けられる。大宰府分類の難点のひとつは、類によって下位の細分指標が異なることである（Ⅰ類のa・b・cは外面の施文の違いであった）。Ⅲ類の代表はⅢ類１ｂに分類される碗（第１図８、第４図27・28）で、博多周辺で14点出土している。８は大宰府分類の当初からこの形式の代表例として図示され馴染み深い。高台を削り出す際、一周した工具が出発点からずれて、その部分が割れているとか、削った粘土屑が見込みに落ちているとか、相当粗雑な作りではある。１ｂの内、数点にみられる左右に長い四葉のクローバー様の櫛描き双花文（第１図８）は、勢いもあり、かつ手馴れた感じがする。北九州市の高野遺跡では古墓の副葬品として三花文のこのタイプが出土した（第４図27）。

しかし、Ⅲ類１で最も出土例の多いのは内面無文のⅢ類１ａ（第４図24・25・26）で、博多周辺では35点ほどある。Ⅲ類１ｃ（29）は、内面の文様に櫛と箆を併用するタイプで15例ある。

大宰府分類にはないが、内面に片切り彫りで花文を描くタイプを抽出すれば８点ほど例がある。博多遺跡群第35次調査で出土した碗の片切り彫りの四葉のクローバーのような双花か三花文（第４図30）は、Ⅲ類１ｂの櫛による花文（第１図８と第４図27）と同文と見た



第５図　その他の同安窯系青磁碗（縮尺1/4）

い。

６．同安窯系青磁Ⅲ類２とⅣ類

Ⅲ類２（第５図31～35）は内面見込みに蛇の目釉剥ぎがあるものである。Ⅲ類１と同様、施文工具によってａ～ｄに細分できる。しかし、見込みに釉剥ぎがあるものにはⅠ類やⅣ類の形態をもつ例など（32～35・38）もあり、この指標による分類には無理がある。

また、外面に文様がなく、内面には花文が描かれるもの（第５図36）を抽出すれば、12例を数え、これも施文工具によってａ～ｄに細分できる。

Ⅳ類（第５図37･38）は、口縁部を１cm前後「く」の字形に外方に折り曲げる特徴を持ち、器壁が薄い傾向にある類である。内面・外面の施文によって、Ⅲ類と同様の細分が可能ではある。なお、この項に挙げた例は同安窯系にも龍泉窯系にも入らないとする考えもある。

以上、同安窯系青磁碗の系譜と種類を見たので、再び「珠光茶碗」に戻る。

７．珠光青磁の真実

茶会記に記された珠光青磁の記述を再度まとめると、①ヒシホ（味噌やもろみの類）色で、②筵目が26、27本あり、③手重く、④見込みに「福」の字がある、となる。これらの特徴をあわせもつ碗を求めて全国の発掘報告書を繰っても、中国各地の窯跡を探し回っても今のところ徒労のようである。典型的なⅠ類１ｂですら同安窯で出土する陶片は日本出土例と同じではないという[注14]。日本に輸入されていない製品は、候補から外すべきであろう。珠光茶碗はもう見つかっているはずである。それは本稿で詳論した同安窯系青磁碗Ⅲ類１である。つまり①青磁の色がもろみの色になってしまい、②外面にまばらな太めの「ヘラ目」がある碗である。ヘラ目が27本というのは櫛描きではありえない。実測図の側面図に６～７本見える程度であり、これはヘラでまばらに片刃彫りしたⅢ類１に多い外面処理であり、第４図の諸例を見れば、26本も27本も充分あり得ると断言できる。③Ⅲ類１の底部から高台は相当厚くずっしりと手に持って重い。Ⅲ類の「すっぽん口」の形態は、熱い茶を啜るには最適の茶碗であろう。また、珠光茶碗の記述に内面文様に触れたものがないので、内面無文のⅢ類１ａ（第４図24～26）に限定できるかも知れない。このように、珠光茶碗はやはり同安窯系の青磁碗とみられるが、Ⅰ類ではなくⅢ類の方が遙かに山上宗二の記述に近いのである。

④の特徴はⅢ類にはない。茶会記にのこされた23回の茶会に使われた珠光茶碗にはかなりの幅があり、Ⅲ類１だけでなくⅣ類や龍泉窯系などの明代青磁で見込みに④「福」の字の刻印が入ったのも含めた「ヒシホ色」の青磁碗が紛れ込んではいなかったか。似たよう

な碗を持ち込んで「珠光茶碗」と言ったような場合もあったかもしれない。

また状況証拠としては、上述したようにこの時期の「茶碗の下克上」がある。砧手（きぬたで）の龍泉窯青磁碗や建窯産の曜変や油滴、灰被天目など過去の権威が否定されてしまうと、矢部良明氏のいう「冷（ひえ）・凍（しみ）・寂（さび）・古（からび）」の新しい美学[注15]にふさわしい焼物はこの粗製の同安窯系青磁しかなかったであろう。これが論理的帰結である。しかも400年も前の日常雑器であったから伝世品もほとんどなく、貴重視されたはずである。秀吉の時代になると井戸茶碗などの高麗製品、そして16世紀末には国産の桃山茶陶の時代を迎える。このように見れば、珠光茶碗は松本茶碗とともに、信長の晩年にほんの一時的に価格が急騰した最後の唐物茶碗であったと位置づけることができる。そしてそれは唐物への決別であり、和物茶碗への出発であった。

（こやま・まさと＝当調査研究センター調査第２課副主査）

注１　稲垣正宏「二つの珠光茶碗」（『関西近世考古学研究』Ⅱ　関西近世考古学研究会）1992

注２　熊倉功夫校注『山上宗二記』　岩波文庫　2006、33頁

注３　以上、『埋蔵銭の物語―出土銭から見た中世の世界―』（上高津貝塚ふるさと歴史の広場編）1997、47頁による

注４　矢部良明『茶の湯とやきもの』　角川書店　1997、130頁

注５　西田宏子「百碗の周辺」（『館蔵茶碗百撰』根津美術館）1985

注６　注１に同じ

注７　『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―　太宰府市の文化財』第49集　太宰府市教育委員会、2000

注８　http://daito.ac.jp/~oukodou/gallery/gallery－1017.html

注９　佐藤一郎『博多78　―博多遺跡群第121次発掘調査報告―』（福岡市文化財調査報告書　第669集　福岡市教育委員会）2001、第９図10、12・17頁。

注10　少なくとも大宰府Ⅲ類の一部（＝福岡市教委Ｖ類）について、『博多60　―第１次・４次・８次調査報告―』（福岡市文化財調査報告書　第543集　福岡市教育委員会）1997　104頁に森本朝子氏は「浙江省の福建省寄りの地域のものではないかと考えている」とある。

注11　①横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館）1978；②『大宰府条坊跡Ⅱ　太宰府市の文化財』第７集　太宰府市教育委員会　1983；③注７文献

注12　『博多出土貿易陶磁分類表　博多―高速鉄道関係調査（１）―　福岡市高速鉄道関係埋蔵文化

財調査報告Ⅳ』（福岡市文化財調査報告書　第105集別冊　福岡市教育委員会）1984；注10文献の104～107頁参照。

注13　亀井明徳『福建省古窯跡出土陶瓷器の研究』都北印刷出版　1995、24～34頁

注14　注13文献、66～67頁

注15　矢部良明「工芸が美学の俎上にのぼった」『禅宗寺院と庭園　日本美術全集』第11巻　講談社　1993、「茶の湯を支える美学――冷・凍・寂・枯の美」（注３文献所収）

補注（資料の出典）

略号『博多駅築港線』：『都計道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告』

福岡市報○：福岡市文化財調査報告書第○集、福岡市教育委員会

『高速博多』：『博多―高速鉄道関係調査』（高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告）

第１図

１：『博多駅築港線』Ⅳ（福岡市報205、1989）138図64、２：『博多62』（福岡市報557、1998）第15図５、３：『博多駅築港線』Ⅰ（福岡市報183、1988）第32図1063、４：『高速博多』（４）（福岡市報193、1988）第30図1359、５：『博多51』（福岡市報448、1996）第166図696、６：『博多駅築港線』Ⅱ（福岡市報184、1988）第195図11、７：『和白遺跡群発掘調査報告書』（福岡市報18、1971）第38図、８：（大宰府史跡第38次）注11②文献Fig.11、９：同上、10：同上、11：『高速博多』（2）（福岡市報126、1986）第37図18、12：『大宰府条坊跡ＸＶ』―陶磁器分類編―（太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会、2000）Fig.13

第３図

13：『田村遺跡－Ｖ－』（福岡市報192、1988）169、14：『高速博多』（４）（福岡市報193、1988）第183図215（馬出遺跡群）、15：『博多69』（福岡市報627、2000）第10図48、16：『博多駅築港線』Ⅳ（福岡市報205、1989）180図34、17：『箱崎６』（福岡市報551、1998）第40図86、18：『博多18』（福岡市報246、1991）第15図113、19：『博多16』（福岡市報244、1991）第15図113、20：『箱崎15』（福岡市報768、2003）第８図11、21：『高速博多』（１）（福岡市報105、1984）第109図6、22：『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告（御笠川南条坊遺跡）』第8集（福岡県教育委員会、1978）第86図2359、23：『博多駅築港線』Ⅴ（福岡市報221、1990）第86図62

第４図

24：『大宰府史跡』昭和63年度（九州歴史資料館、1990）第30図67、25：『高速博多』（４）（福岡市報193、1988）第147図164、26：『博多60』（福岡市報543、1997）第87図447、27：『高野遺跡』（北九州市報198、1997）第18図１、28：『田村遺跡－Ⅳ－』（福岡市報168、1987）第8図27、29：『博多75』（福岡市報666、2001）第60図29、30：「博多35次調査遺物編」（『博多47』付編、福岡市報396、1995）第13図356

第５図

31：『博多16』（福岡市報244、1991）186図６、32：『博多60』（福岡市報543、1997）第87図445、33：『田村遺跡－Ｖ－』（福岡市報192、1988）第60図172、34：『高速博多』（2）（福岡市報126、1986）第88図下４、35：『博多60』（福岡市報543、1997）第87図448、36：『博多60（福岡市報543、1997）第87図448、37：『高速博多』（3）（福岡市報156、1987）第105図17、38：『博多48』（福岡市報397、1995）第350図33